# 「量質転化」の法則 ―40年の塾歴を振り返って

勝浦 邦幸（かつうら くにゆき）（外In1977）

略歴：都内の予備校講師を経て、郷里の高松市で大学受験専門の「かつうら英語塾」を主宰

## ワーク・ライフ・バランス

「でもしか」から始めた塾だが、気がつくと40年が経っている。自宅の14畳の部屋から、これまで東京外国語大学に11名、東京大学に30名、国公立大学医学部に37名等へと塾生は進学していった。しかし、進学塾を掲げたことはない。進学指導もしたことはない。英語を教えてきただけである。15年前にホームページを作ったが、看板も広告も出してはいない。それでも、いつの間にか地元で最も古い塾の一つとなっている。

職業選択には2つの道がある。安定しているが充実感の乏しい道と、確実性はないが大きなやりがいが感じられる道と。私は後者を選び満足している。それ以上に、教えることそのものに深い喜びを感じている。天職とは、どこかに「あるもの」を見つけるのではなく、いま自分がやっていることを理想のものにしていくことである。ワーク・ライフ・バランスが叫ばれて久しいが、私は40年前からずっと、1日1コマ、午後8時から10時までの2時間だけの授業を続けている。2025年度からは、金土日の3日が勤労日である。

塾のビジネスモデルはシンプルだ。始めるのも閉じるのも容易だが、続けるのは難しい。時代の移り変わりとともに、受験生の数も質も変わっていく。教える側も常に学び、変わり続けなければならない。その中で語学学習の本質は変わらない。その変わることのない本質と思えるものを紹介したい。

## 「ういろう売り」の台詞の衝撃

「ういろう売り」は歌舞伎の演目で、台詞の分量は原稿用紙4、5枚分に及ぶ。内容は意味不明な早口言葉が延々と続き、俳優やアナウンサーの滑舌訓練にも利用されている。この台詞の音読を、面白半分で日課にしていた時期がある。

16歳の高1生たちと（自宅の塾で）

ある日、センセーショナルな体験をした。目が追う言葉と、口から出てくる言葉がずれていたのだ。気がつけば、読んでいる原稿よりもずっと先の箇所をしゃべっていたのだ。まさかと思い、原稿を伏せてみても、台詞は口からスラスラ出てきたのである。

覚えようとせずに覚えてしまったことに気づいた瞬間だった。これこそ語学学習の本質だと思った。言葉の習得は才能ではなく、継続できるかどうか、意思の問題なのである。

このことを体得した意義は大きい。「英文がなかなか覚えられない」と嘆く塾生がいたら、くり返せば必ず覚えられる、と実体験から励ますことができる。ただし、その「くり返し」の回数は十数回でも数十回でもなく、数百回である。これは、台詞が自然と口から出てくるようになるまでにおよそ700回のくり返しを要した体験から来ている。

## 量によって質が転化する

「量質転化」とは、量を積み重ねていくと質的な変化が起こるというもの。質が変化するまで徹底的に量をこなすのである。この「量質転化」を、そもそもヘーゲルはどの著書でどのように言っているかを調べてみたことがある。『小論理学』（岩波文庫上巻・ヘーゲル著・松村一人訳）のP.325～P.327にこうある。

「小麦を一粒ずつ積み上げていくと小麦の山ができる。馬のしっぽの毛を一本ずつ抜いていくと禿げたしっぽになる。水を熱し続けると水蒸気に変わり、